

理解度&釣れる度100%

丸

マルキュー

優良 餌本



# パワーエサ

# パック



バッグに  
一冊入れて  
おこう!



The target period 6月~11月

## Contents

- 02 Pickup! New item!! 「力玉ハード (M)、(S)」
- 04 両ダンゴの浅ダナ釣り
- 03 両ダンゴのチョーチン釣り
- 12 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 13 鞋系バラケセットの浅ダナ釣り
- 20 「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り
- 24 「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り
- 23 ベレット系両ダンゴの底釣り
- 34 「カクシン」を支える調整エサ!

# 夏秋号

# 2024

# HERA BAIT POWER BOOK

Pickup! New item!!

# 「カ玉ハード(M)」 「カ玉ハード(S)」

## 「カ玉ハード」シリーズがサイズ展開!



ビンから取り出して、そのまま使える粒状くわせエサ「カ玉ハード」シリーズは、そのエサ持ちのよさが好評を博している。昨年発売した(L)に続き、今年は(M)と(S)の2サイズがラインアップ。季節や釣り方に合わせサイズ選択が可能となった。



手順②

「つけ込みにこれだ!!ソフト」を注ぐ。目安はビンの肩まで。



手順③

ビンの蓋をしつかりと閉じ、中身がよく混ざるようビンを振る。その後、冷暗所で丸1日放置。



手順④

粒に液体が染み込んだら、キッチンペーパーなど吸水性の高いシートに中身を広げる。



手順⑤

シートを押し当てて水分を取りきる。粒を潰さないように注意。



手順⑥

水分を取ったらビンに戻し完成。

「感嘆」に代表される即席のくわせエサを使うさい、アルミポンプを使用するのが当然になりました。これはくわせエサをより硬い方向で使うようになったからです。その理由は、大型化しつつある管理釣り場のへら鮎に対して、食いのよさよりもハリにエサが付いていることの安心感を釣り人が重要視しているからです。

ビン詰めタイプの粒状くわせエサでエサ持ちのよい「力玉ハード」シリーズはまさにこの時流にマッチした存在となっています。さらにその有効性を高めるために、サイズ違いのラインナップを揃え、「力玉ハード（S）」「力玉ハード（M）」が新発売となりました。

大きさは「力玉ハード（L）」を含めて3種類。使い分けとしては、季節に応じた活性に合わせてられるサイズラインナップとなっていますので、寒い時季には「力玉ハード（M）」で段差の底釣り、「力玉ハード（S）」を使用して宙のセット釣りなどで使用できます。また、暖かい時季には「力玉ハード（L）」や「力玉ハード（M）」を使用して宙のセット釣りで活躍します。このようにサイズ展開することで、あらゆるセット釣りに対応可能となりました。

常時へらバックの中に入れておけば、その日の釣り場状況によってはセット釣りをせざるを得ない状況でも、即座に現場でその日の状況に対応ができます。様々なシチュエーションで使えるので、3サイズを揃えておくと便利でしょう。

## エサ持ちアップ & カラーバリエーションでローテ「つけ込みにこれだ!! ソフト」で漬け込み



「力玉ハード」シリーズを「つけ込みにこれだ!! ソフト」で漬け込むことで、エサが若干しまりハリ抜けしにくくなります。また、あざやかな黄色に着色できるのでノーマルの白とのカラーローテーションが可能。「つけ込みにこれだ!!」にはハードとソフトがありますが、硬くなりすぎないソフトがオススメです。

手順①



ビンの蓋を開ける

## 盛期に数を釣る定番釣法

# 両ダンゴの浅ダナ釣り

## 釣り方の基本

両ダンゴの浅ダナ釣りは、盛期のへら鮎釣りにおいて、一番数が釣れる釣り方です。テンポよくエサ打ちを繰り返すスピーディーな釣りで、より多くのへら鮎を釣りあげるのが面白さです。

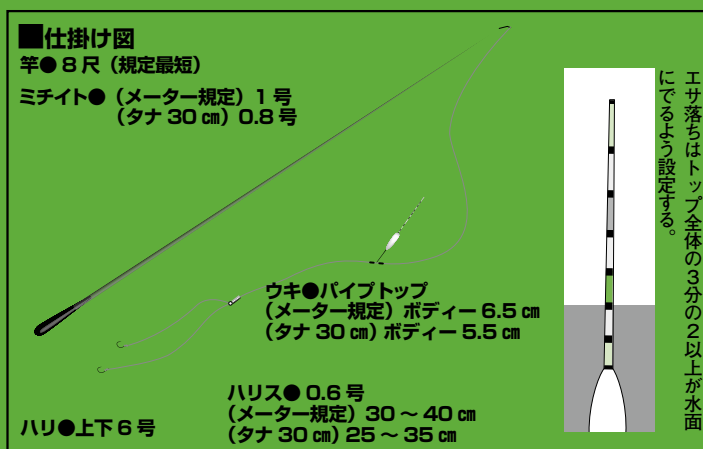
この釣り方において一番重要なのはエサを持たせることです。高活性時のへら鮎はエサに対して強烈にアタックしてきます。このへら鮎のアオリにエサが負けてしまえば、いくらウキが動いてもなかなか食わせることができません。

「エサは持たせているよ」というかもしれませんが、実は肝心のタイミングでエサが抜けてしまっていることが多いもの。強いサワリがでて、いかにもアタリそうなところでアタらないのは、まさにその典型です。

この釣りではとにかくエサを持たせることに徹底して釣りを組み立てることが重要になります。

## タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。弱いセッティングではエサを持たせることが難しくなり、釣りそのものが組み立てられません。特にウキは大きめのものを選びましょう。



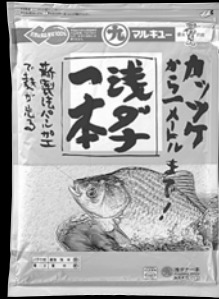
## エサ持ち抜群！軽さでアピール！！

### ●エサブレンド

**「カクシン」500 cc+**  
**「浅ダナー本」100 cc+**  
**「バラケマツハ」100 cc+**  
**水 200 cc**



+



+



+

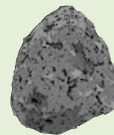


### ●作り方と打ち始め

「カクシン」500 cc、「浅ダナー本」100 cc、「バラケマツハ」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせてから水200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。エサに吸水が安定するまでしばらく放置。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エアー抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

### エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

### STEP ② タナを浅くする（※タナ規定が無い場合）

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎のアタックが減りますのでその分エサが持つようになります。ですから、タナ規定がない釣り場でエサが持たないときは、シンプルにタナを浅くしてみましょう。

### STEP ③ ハリスを詰める

ハリスを詰めると落下中のアピールが減り、へら鮎のアタックが減るのでエサが持つようになります。先に触れたタナを浅くするのと同じような効果が得られます。特にウキが立ってからなかなかエサがナジまないような場面で試したい対応です。メーター規定ではスタート時のハリス長が30cmと40cmなので、まずは5cmずつ詰めてみましょう。それでもエサが持たないようならさらに5cmずつ詰めてみましょう。また、ハリスを詰めることでサワリやアタリがでなくなったら、ハリスの長さは元に戻してください。

### STEP ④ 手水は慎重に……

エサをやわらかくするために手水をすることもあるでしょう。手水と押し練りで調整という表現もありますが、まずはエサを持たせることが優先ですので、押し練りのみで調整します。硬くて持つエサで釣ればそれで問題ありません。強いアタリがでて空振るようならハリスを詰め、それでもカラツンが解消できないとき、濡らした手で押し練りをし少しだけエサのタッチをやわらかくします。やわらかいエサはエサ持ちが悪くなりますし、エサ付けも難しくなりますので、注意が必要です。

### ★上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは両ダンゴにこだわることなく、「ヒゲトロ」セット（20ページ）やウドンセット（12ページ）などに釣り方を変更しましょう。

# 両ダンゴの浅ダナ釣り

## エサを持たせるテクニック

### STEP ① エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアアを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態から使い始めること。

### 押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアアを抜くのが“押し練り”。エアアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



ダイナミックな釣りが楽しめる

# 両ダンゴの チョーチン釣り

## 釣り方の基本

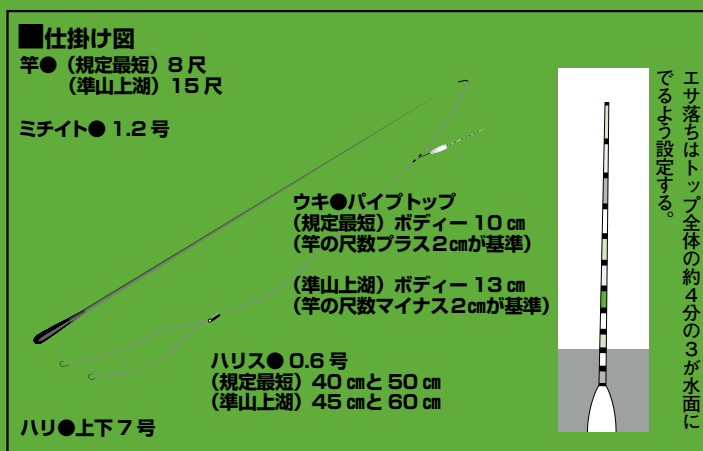
両ダンゴのチョーチン釣りは、豪快なアタリと深場からへら鮒を引き抜くダイナミックさが面白い、盛期ならではの釣り方です。

この釣り方において一番重要なのは、浅ダナ同様エサを持たせることです。浅ダナより狙うタナが深い分、よりしっかりとエサを持たせなければなりません。タナまで確実にエサを持たせることがへら鮒を厚く寄せることにつながり、それぞれ時合ができれば毎回のよう強いアタリで釣れ続きます。そのためにも必ずエサを持たせることを強く意識してください。

またオモリを十分に背負う大きなウキを使うことも重要なポイントです。へら鮒の活性が高くなる時季に小さいウキではエサを確実にタナまで届けることができません。エサがタナまで届かなければ釣りになりませんので、大きいウキを使うことが大前提です。

## タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。弱いセッティングではエサを持たせることが難しくなり、釣りそのものが組み立てられません。特にウキは大きめのものを選びましょう。





## 管理釣り場の規定最短尺推奨ブレンド

### ●エサブレンド

**「カクシン」400 cc+**  
**「凄麩」200 cc+**  
**「バラケマツハ」100 cc+**  
**水 200 cc**



+



+



+



### ●作り方と打ち始め

「カクシン」400 cc、「凄麩」200 cc、「バラケマツハ」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

### エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

# 両ダンゴのチョーチン釣り

## エサを持たせるテクニック

### STEP ① エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから“押し練り”を加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

手の甲側を使ってエサを押し、エアーを抜くのが“押し練り”。



### STEP ② エサを大きく付ける

狙いのタナまでエサが届かなければこの釣りは成立しません。ウキが沈没するぐらいしっかりとナジミ幅をだして釣ることを意識しましょう。もう少しエサを持たせたいと思ったら単純にエサを大きく付けてみましょう。ハリに残るエサ量が増えれば、それだけナジミ幅も多くなります。

### STEP ③ ハリスを詰める

ハリスを詰めると落下中のアピールが減り、へら鮎の攻撃が減るのでエサが持つようになります。ウキが立ってからなかなかエサがナジまないような場面や空振りやスレアタリが多いときに試したい対応です。スタート時のハリス長が長めの設定なので、まずは5cmずつ詰めてみましょう。それでもエサが持たないようならさらに5cmずつ詰めてみましょう。また、ハリスを詰めることでサワリやアタリがでなくなったら、ハリスの長さは元に戻してください。

### ★上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは両ダンゴにこだわることなく、「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り（24ページ）に変更しましょう。

## 準山上湖や水深のある管理釣り場推奨ブレンド

### ●エサブレンド

**「カクシン」400 cc+**  
**「凄麩」200 cc+**  
**「BB フラッシュ」200 cc+**  
**水 200 cc**



+



+



+

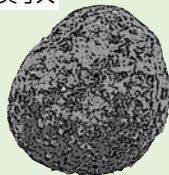


### ●作り方と打ち始め

「カクシン」400 cc、「凄麩」200 cc、「BBフラッシュ」200 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

### エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

暖季の混雑時対応策（6月、10月、11月）

# ウドンセットの 浅ダナ釣り

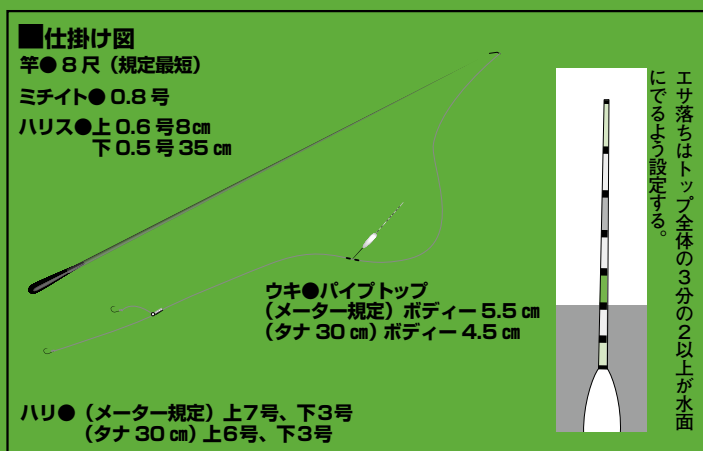
## 釣り方の基本

魚の活性が高い暖季であっても混雑時や何かしらの理由で食いが渋ることはあります。両ダンゴや「ヒゲトロ」セットでサワリやアタリが少ないときは、ウドンセットを試してみましょう。

冬に行なう一般的なウドンセットは開くエサをブレンドの軸とし、寄せることに主眼を置きますが、暖季のセットはそこまで寄せを意識しません。エサを打てばある程度魚は寄ってきます。ただその寄りが少ないので、少しだけ距離をとった（下ハリスが長い）セッティングで寄りの悪い状況でもアタリを増やしていくのです。つまり、接近戦でのウドンセットになります。逆に極端に開くエサでは、そのバラけた粒子を追ってへら鮒は遠巻きになりますので注意が必要です。また、セッティングはセット釣りだからといって弱くする必要はありません。

## タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



## しっかり持たせて釣るブレンド

### ●バラケブレンド

**「粒戦」50 cc+**  
**「粒戦細粒」50 cc+**  
**水 150 cc+**  
**「ヤグラ」100 cc+**  
**「ふぶき」200 cc**



+



+



+



+



### ●作り方と打ち始め

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせるところに水150 ccを注ぐ。吸水させるために5分ほど放置する。そこに「ヤグラ」100 ccと「ふぶき」200 ccを入れ、20～30回かき混ぜてムラなく仕上げる。これが基エサで、使うときは1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。トップ先端までしっかりナジミができればOK。ナジミが浅ければさらに押し練りする。

### エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

## STEP ② タナを浅くする（※タナ規定が無い場合）

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮒のアタックが減ります。ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトヅレが多いときはシンプルにタナを浅くしてみましょう。また、タナを浅くすることでエサも持たせやすくなりますので、しっかりナジませてからの釣りがしやすくなります。

## STEP ③ ハリスを詰める

ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトヅレが多いときは下ハリスを詰めてみましょう。スタートは35cmですので5cm詰めて30cmにしてみましょう。それでも釣りにくい場合は、ウキが動きすぎて釣りにならないようなら魚の活性が高いと判断して「ヒゲトロ」セット（20ページ）、あるいは両ダンゴ（4ページ）に釣り方を変更しましょう。

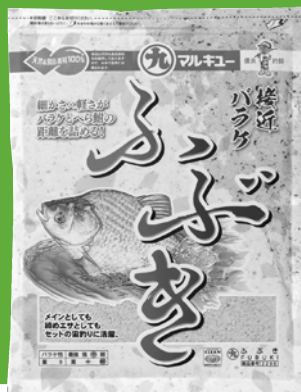
## ★上手く釣れないときは……

ウドンセットの浅ダナ釣りをしていてあまりウキが動かない、サワリやアタリが少ないときは、浅ダナの釣り自体がよくないと判断します。チョーチン釣りや底釣りなど、違う釣り方に変更しましょう。

# 接近バラケ「ふぶき」

軽くて細かいことが特長のバラケエサ。素材が微粒子ゆえに、落下中の粒子の広がり（こぼれ）が少なく、また麩そのものが比較的長い時間タナに留まるので、低活性時のへら鮒をくわせエサへ近づけることが可能。そのため、高水温時の接近戦にも効果的なエサとなっている。

重 さ ■□□□□  
バラケ性 ■■□□□  
標準ブレンド比 5 : 1



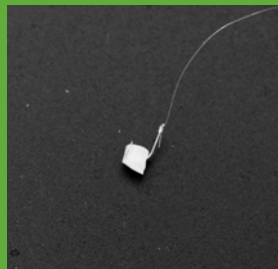
# ウドンセットの浅ダナ釣り

## 基本必須テクニック

### くわせエサは「カ玉ハード (S)」 「カ玉ハード (M)」



ビン詰めタイプの粒状くわせエサ。エサ持ちがよくへら鮎に揉まれてもハリ抜けしにくいので、高活性時でも安心して使える。大きさが違う (S) と (M) のローテーションで使い分けよう。

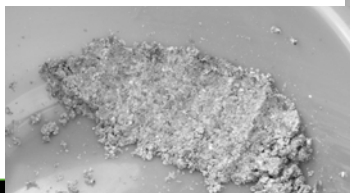


#### STEP ① エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

#### 押し練り

手の甲側を使ってエサを押してアアーを抜くのが“押し練り”。アアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



暖季の混雑時対応策（7月、8月、9月）

# 麩系バラケセットの 浅ダナ釣り

## 釣り方の基本

暖季の混雑時に、両ダンゴで釣り切るのはかなり技量が求められます。かといってセット釣りにすれば釣れるかといえば、これもそう簡単ではありません。そんな場面で有効なのが麩系バラケを用いたウドンセット。簡単に言うと、ウドンセットと両ダンゴの間、セッティングはセット、釣りのイメージは両ダンゴといったところでしょうか。開きのある大きめのバラケエサを打つことで厚くへら鮎を寄せ、短めのハリス、大きめのくわせエサで仕留めます。渋いときに行なうセット釣りとはまったく違う釣りです。ですからセッティングも強めになります。ウキは大きく、ハリも大きくなります。釣り方のポイントは、開くバラケエサをしっかりとナジませること。厚い寄りに負けるようではこの釣りは成立しません。エサの大きさと付け方で確実にナジミができるようにします。強い動きにひるむことなく攻めていくことが肝心です。

## タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。

### ■仕掛け図

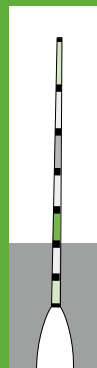
竿●8尺（規定最短）

ミチイト●1号

ハリス●0.6号上8cm、下35cm



ハリ●（メーター規定）上8号、下5号  
（タナ30cm）上7号、下4号





開きは強いがまとめやすい！

●バラケブレンド

「バラケマツハ」300 cc＋  
「凄麩」100 cc＋  
「浅ダナー本」100 cc＋  
水 100 cc



＋



＋

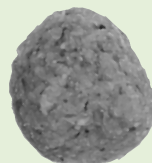


●作り方と打ち始め

「バラケマツハ」300 cc、「凄麩」100 cc、「浅ダナー本」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。使うときは半分に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。トップ先端までしっかりナジミができればOK。ナジミが浅ければさらに押し練りする。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝8号

## STEP ② エサを大きく付ける

エサを大きく付けることで単純にエサをナジませることができます。バラケエサを食わせるのではなく、へら鮎を厚く寄せることが目的ですので、大きめのエサを打っても問題はありません。ただし、大きなエサは付けるのが難しい面もあります。しっかりとエサ付けすることを心がけましょう。

## STEP ③ ハリスを詰める

ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトズレが多いときは下ハリスを詰めてみましょう。スタートは 35 cm ですので 5 cm 詰めて 30 cm にしてみましょう。それでも釣りにくい場合は、さらにもう 5 cm 詰めてみます。それでも釣りにくい場合は「ヒゲトロ」セット (20 ページ) に釣り方をかえてみましょう。逆にアタリ数が減ったときはハリスの長さを戻しましょう。

## ★上手く釣れないときは……

この釣りであまりウキが動かない、サワリやアタリが少ないことは考えにくいですが、もし上手く釣れないなら浅ダナの釣り自体がよくないと判断します。両ダンゴのチョーチン釣り (8 ページ) または「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り (24 ページ) に変更しましょう。

# くわせエサは「カ玉ハード (L)」



ビン詰めタイプの粒状くわせエサ。エサ持ちがよくへら鮎に揉まれてもハリ抜けしにくいので、高活性時でも安心して使える。(S)、(M)、(L) と 3 サイズあるが、一番大きな (L) を使う。



# 麩系バラケセットの浅ダナ釣り

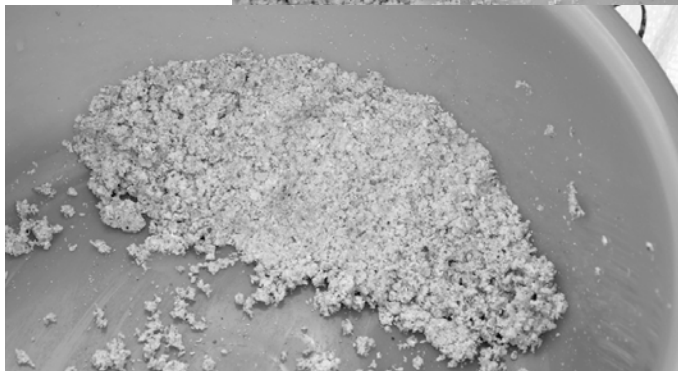
## 基本必須テクニック

### STEP ① エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

#### 押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



押し練り、を加えてエアーを抜いた状態。こうすることでエサ付けしやすくエサ持ちもよくなる。持たなければ、押し練りをさらに繰り返す。

両ダンゴで釣れそうで釣れないときが出番

# 「ヒゲトロ」セットの 浅ダナ釣り

## 釣り方の基本

「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣りは、両ダンゴで釣れそうでなかなか釣れないときに有効な釣り方です。ダンゴエサに興味は示している（サワリはある）が、混雑によるプレッシャーや食いがイマイチで、ダンゴエサそのものを食わないとき、ウキの動きでいえばサワリがあるのに食いアタリがでにくいときがこの釣り方の出番です。

この釣りは、バラケエサに近づいてきたへら鮒がくわせエサの「ヒゲトロ」を食う仕組み。セット釣りとはいってもある程度バラケエサに近づける意識が必要で、場合によっては食いアタリの半分近くがダンゴエサを食ってきても問題ありません。

そのためには、バラケエサをタナまで持たせることが大前提となります。ウドンセットのように開くバラケで寄せるのではなく、しっかりバラケをナジませてから釣りを組み立ててください。

## タックルセッティング

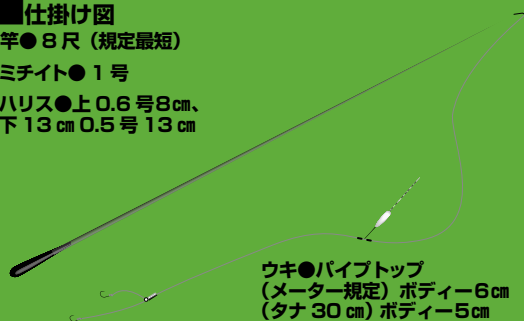
仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。

### ■仕掛け図

竿●8尺（規定最短）

ミチイト●1号

ハリス●上0.6号8cm、  
下13cm 0.5号13cm



ウキ●パイプトップ  
（メーター規定）ボディー6cm  
（タナ30cm）ボディー5cm

ハリ●  
（メーター規定）上7号、下5号  
（タナ30cm）上6号、下5号

エサ落ちにはトップ全体の4分の3以上が水面にでるよう設定する。

簡単に魚を寄せて持たせられる！

●バラケブレンド

「バラケマツハ」200 cc+  
「ふぶき」200 cc+  
「ダンゴの底釣り夏」50 cc+  
水 100 cc



+



+

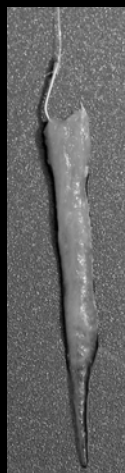


+



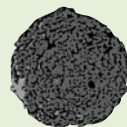
●作り方と打ち始め

「バラケマツハ」200 cc、「ふぶき」200 cc、「ダンゴの底釣り夏」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

## STEP ① エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

### 押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアを抜くのが“押し練り”。エアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



## STEP ② タナを浅くする

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎のアタックが減りますのでその分エサが持つようになります。ですから、タナ規定がない釣り場でエサが持たないときは、シンプルにタナを浅くしてみましょう。

### ★上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは状況が渋いと判断してウドンセット（12ページ）に釣り方を変更しましょう。

# 「ヒゲトロ」 セットの浅ダナ釣り

## 基本必須テクニック

### 「ヒゲトロ」の使い方

「ヒゲトロ」は盛期のセット釣りに向いたくわせ用トロロエサ。使用方法は水に浸してハリに引っ掛けるだけで、良質な繊維がしっかりとハリがかりします。チャック袋を採用しているので、開封後も品質が安定。1度の釣行で使いきれなくても次回もそのまま使用できる。●内容量 18g

「ヒゲトロ」は品質をキープできるチャック袋を採用。



①袋からトロロを取り出す。長くて強い良質な繊維が特徴。



②使う分だけちぎって取り出す。残りはチャック袋に仕舞っておく。



③長い繊維は細かくちぎる。



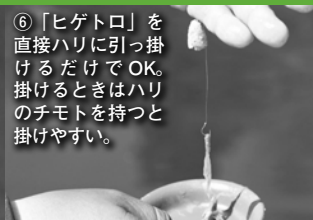
④ちぎった「ヒゲトロ」を手に乗せて水に浸す。



⑤軽く水を絞って小皿などに移す。



⑥「ヒゲトロ」を直接ハリに引っ掛けるだけでOK。掛けるときはハリの手モトを持つと掛けやすい。



両ダンゴで釣り切れなときが出番

# 「ヒゲトロ」セットの チョーチン釣り

## 釣り方の基本

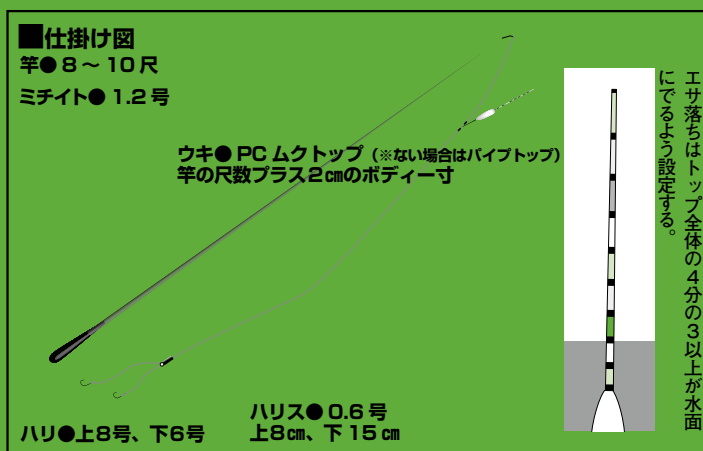
「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣りは、浅ダナ釣りと同様に両ダンゴで釣れそうでなかなか釣り切れなとき有効な釣り方です。また、チョーチン釣りは一定のポイントにエサを入れやすいので、強固な時で大釣りも可能です。

ダンゴエサに興味は示している（サワリはある）が、ダンゴエサそのものを食わないとき、ウキの動きでいえばサワリがあるのに食いアタリが少ないときこそこの釣り方の出番です。

バラケエサに近づいてきたへら鮒が近くにあるくわせエサの「ヒゲトロ」を食う仕組みなので、しっかりエサをタナまで持たせることが求められます。それにはしっかり持たせられるエサブレンドであること、適量のオモリを背負うウキを使うことがポイントとなります。

## タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。





軽さと開きでアピールしつつしっかり持つ！

●バラケブレンド

「バラケマツハ」350 cc+  
「カルネバ」100 cc+  
水 100 cc



+

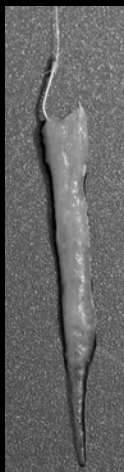


+



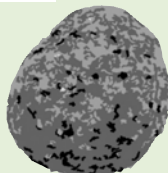
●作り方と打ち始め

「バラケマツハ」350 cc、「カルネバ」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=8号

## STEP ① エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

### 押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアを抜くのが“押し練り”。エアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



## STEP ② 縦誘いを駆使する

しっかりバラケエサを持たせることが大切ですが、極端に持ちすぎた場合は、竿先を持ち上げるように縦誘いを入れてみましょう。これでバラケ性が促進されへら鮎に興味を惹かせることができます。ただし、縦誘いでバラケエサが抜けては意味がないので注意してください。

### ★上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは状況が渋いと判断してウドンセット（12ページ）に釣り方を変更しましょう。

# 「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り 基本必須テクニック

## くわせは「極上とろろハード」

繊維が強くトロロのネバリもあるのでエサ持ちに優れている。盛期のへら鮎の強いアオリに負けることなくハリ残りしてくれる。タナの深いチョーチン釣りではよりエサ持ちに優れた「極上とろろハード」がオススメだ。●内容量 25g × 2

繊維の強さが特長の「極上とろろハード」



①袋から使う分だけちぎって取り出す。



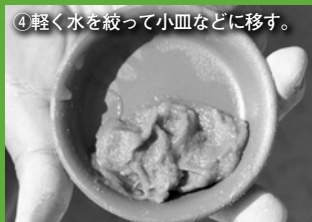
②ハサミで切って取りだしてもよい。



③ちぎった「極上とろろハード」を手に乗せて水に浸す。



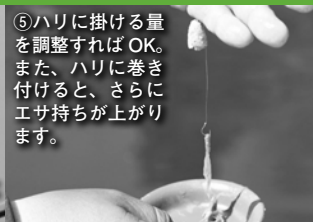
④軽く水を絞って小皿などに移す。



⑤ハリのチモトを持って直接ハリに引っ掛ける。



⑥ハリに掛ける量を調整すればOK。また、ハリに巻き付けると、さらにエサ持ちが上がります。



ナジミ幅のキープを意識しよう

# ペレット系 両ダンゴの底釣り

## 釣り方の基本

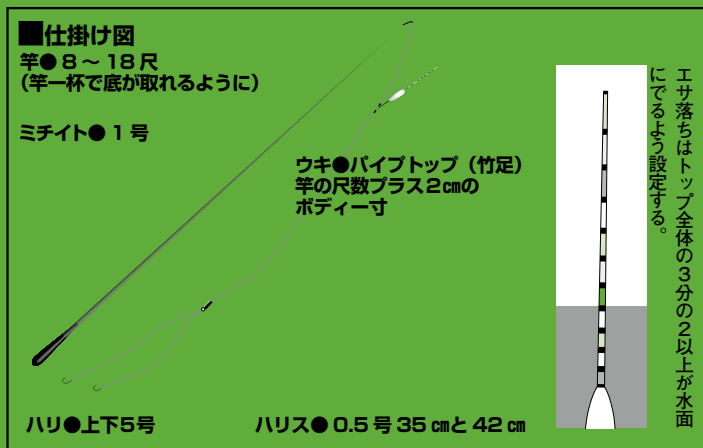
底釣りは独特の動きが楽しめ、ある意味へら鮒釣りで一番面白い釣り方とも言えます。盛期の底釣りはしっかりエサをナジませていかないとウワズリを招いたり、ウキが動きすぎて釣りづらくなります。スタート時から3~4目盛りしっかりナジミ幅をだし、魚が寄ってきてからもこの3~4目盛りのナジミ幅をキープするようにします。

このナジミ幅をキープするには、エサ付け圧（強さ）の強弱、エサの大きさをコントロールします。あくまでセッティングは固定したまま、エサ付けで調整してください。

魚が少ない（ウキの動きが静か）ときは大きめで圧は弱め、魚が多い（ウキがよく動く）ときは小さめで圧は強くなど、1投ごとにウキの動きを見ながらのエサ付けを意識してください。一番はナジミ幅をキープすること。これだけは頭に入れておきましょう。

## タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。竿の長さは竿一杯（チョーチン）で底が取れる長さを選びましょう。ウキは大きめで、釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



## 集魚力抜群のペレット系ダンゴ

### ●エサブレンド

**「粒戦」** 25 cc +  
**「ペレ底」** 75 cc +  
**水** 50 cc

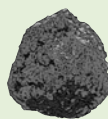


### ●作り方と打ち始め

「粒戦」 25 cc、「ペレ底」 75 ccをエサボウルに入れ、そこに水 50 ccを注ぐ。ムラがないように大きく 20 回ほどかき混ぜ、ボウルの隅に寄せるようにしてしばらく放置。「粒戦」がしっかり吸水したら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これで 3～4 目盛りのナジミ幅ができれば OK。ナジミが少ないようならさらに押し練りで調整する。

### エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

#### STEP ④ エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安として、ウキのナジミ幅が3～4目盛りでるエサ持ちを心がけます。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなりますが、そのときはさらに押し練りを加えて3～4目盛りのナジミ幅をキープするように調整します。

##### 押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアを抜くのが“押し練り”。エアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



#### STEP ⑤ ナジミ幅を意識しよう

底釣りでは、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。両ダンゴの底釣りの場合、3～4目盛りのナジミ幅がでるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないカタナをはわせすぎていることとなります。逆に多い場合は、エサが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えても同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

#### ★上手く釣れないときは……

魚が高い位置にいてうまくナジませることができない、逆に魚がいないのでエサがナジんだままウキが戻ってこないときなどは、底釣りが成立しない時と諦めて宙釣りに変更しましょう。

# 両ダンゴの底釣り

## 基本必須テクニック

### STEP ① ウキの選択

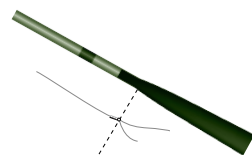
ウキのサイズは竿の長さ（＝水深）によって変わってきます。竿の尺数プラス2cmが基準となります。前後1cmのサイズなら問題ありませんが、極端に小さいものや大きいものは避けましょう。

#### 竿の長さごとのウキのボディサイズ

8尺	10 cm	13尺	15 cm
9尺	11 cm	15尺	17 cm
10尺	12 cm	16尺	18 cm
11尺	13 cm	18尺	20 cm
12尺	14 cm		

### STEP ② 仕掛けの長さを決めておこう

タナが生命線の底釣り。釣っている途中でタナがおかしくなることもあります。理由としては“底が掘れた”ことが多いですが、仕掛けのミチイトの伸び縮みが原因のこともあります。それを判断するためにも仕掛けの長さを把握しておきましょう。



たとえば、スイベルがくる位置を握り上部、竿との継ぎ目と決めておく。

### STEP ③ スタートのタナ設定

エサが確実に底に着く状態で打ち始めるために、タナ取りで決めた上バリトントンの位置から5cmズラした（深くした）タナから始めましょう。そして、実際にエサ打ちをして3～4目盛りのナジミ幅がでることを確認してください。ナジミ幅が多いときはエサが底から切れている、逆に少ないときは這わせすぎている可能性があります。

## ●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



### ③ウキをズラす

水面にでたトップ先端の位置に合わせるようにミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが上バリトントンといわれる設定だが、これでは上ハリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。

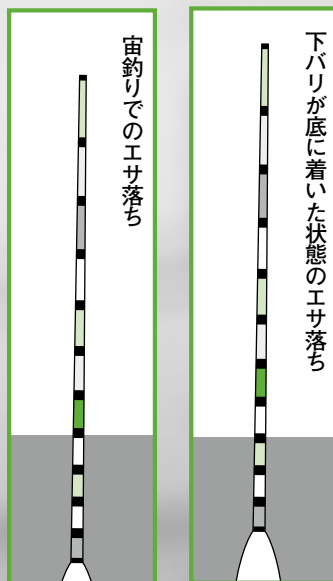


目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

### ④下バリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。下バリが底に着いていれば、下バリの重さがウキにかからないので、宙で確認したエサ落ちより目盛りが多くでる。それが確認できればOK。

仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだしとすると、下バリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす（深くする）かタナを測り直すこと。



タナ取りが可能となります。



# バランスの底釣り

## 【実演】タナ取り方法

【実演】 フロートを使用した底釣りのタナ取り方法

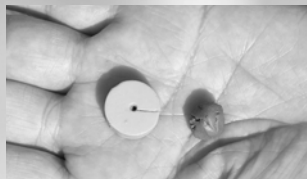
### フロートを使用した **実演** 底釣りのタナ取り方法

#### ① 宙の状態のエサ落ちを確認

上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

#### ② タナを測る

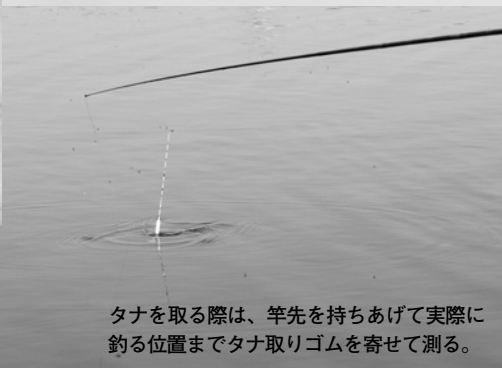
下バりにタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを付けて水深を測る。普通に打ち込んだだけでは沖を測ってしまうので、ウキを持ち上げるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。このとき、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。



タナ取りゴム（粘土オモリ）に上下2本のハリを刺してタナを取る。



タナを取る際は、竿先を持ち上げて実際に釣る位置までタナ取りゴムを寄せて測る。

再生 (k)

## より正確なタナ取

## 「凄麩」

エサ持ち=↓  
重さ=↑  
粒子=↑



エサ持ち

100

80

60

40

20

エサ持ち= 65  
重さ= 45  
粒子= 55



粒子

重さ

## 「浅ダナー本」

エサ持ち=↓  
重さ=↓  
粒子=↓



エサ持ち

100

80

60

40

20

エサ持ち= 40  
重さ= 17  
粒子= 25



粒子

重さ

## 「BB フラッシュ」

エサ持ち=↓  
重さ=↓  
粒子=↑



エサ持ち

100

80

60

40

20

エサ持ち= 75  
重さ= 23  
粒子= 65



粒子

重さ

## 「カルネバ」

エサ持ち=↑  
重さ=↓  
粒子=↓



エサ持ち

100

80

60

40

20

エサ持ち= 90  
重さ= 20  
粒子= 30



粒子

重さ



エサ持ち=80  
重さ=25  
粒子=40

# 「カクシン」を 支える 調整エサ!

ダンゴエサのベースとして広く使われている「カクシン」。現代両ダンゴエサの中心的存在である。この「カクシン」ベースの両ダンゴを使いこなすポイントは、ここに何をブレンドするかだ。そこで、「カクシン」と相性のよいエサを「へらエサブレンド計算ツール」のチャートを利用して紹介しよう。ブレンドする効果が明確に分かるだろう。

へらエサブレンド  
計算ツールはこちら↓



## 「コウテン」

エサ持ち=↓  
重さ=↑  
粒子=↑



エサ持ち=65  
重さ=50  
粒子=55

エサ持ち

100  
80  
60  
40  
20

粒子

重さ

## 「バラケマッハ」

エサ持ち=↓  
重さ=↑  
粒子=↓



エサ持ち=40  
重さ=45  
粒子=35

エサ持ち

100  
80  
60  
40  
20

粒子

重さ

# その戦術にジャストなサイズを。

ハリ持ちにも、大きさにもこだわった粒状くわせエサ



2024年  
5月発売

2024年  
5月発売



繊細さが求められる  
場面に最適

●カ玉ハード(S) 30g



カバー領域が広い  
スタンダードなサイズ

●カ玉ハード(M) 30g



暖季は宙釣りに、  
冬季は段差の底釣りに

●カ玉ハード(L) 35g